

「民族と政治」 37. 3月号

下中翁を偲びて



(下中翁の写真と壇上は湯川博士)

はしがき

巨人下中弥三郎翁が逝去されてから満一周年を迎えるに当り、岸信介、茅誠司、原安三郎の諸氏が発起人となつて「下中翁を偲ぶ会」が去る二月二十日丸の内工業クラブで催され、参会者約五百名、殆ど日本の各界を網羅し、またインド大使セイロン大使を始め故翁と特別関係の深かったアジア、アラブ友邦諸国の大使や代表者も出席され、日本無罪論のバール博士や、各国の世界連邦運動の指導者等からも遠くメッセージを寄せられ、まことに故翁にふさわしい盛大な追悼会であった。当日は中谷本社主幹の開会の辞に次いで清瀬三郎の諸氏から下中翁に対する追憶の言葉が述べられた。左にこれを輯録して、この一世の文化的巨人を偲ぶよすがとした。

下中弥三郎翁を追憶する言葉 (発言順)

- 衆議院議長 清瀬一郎
- 法政大学教授 谷川徹三
- 衆議院議員 中曾根康弘
- 三菱電機会長 高杉晋一
- 京都大学教授 湯川秀樹
- 衆議院議員 松村謙三

東洋民族の解放と下中翁

清瀬一郎

本日中谷君その他の発起人のお世話で故下中弥三郎翁を偲ぶ十分な機会をお与え下さいまして、掲げられたお写真の温客に接し、録音の翁のお言葉を拝聴し、またパンフレットには故人の歌までも編集されており、この翁を偲ぶことはこれで十分でございます。私は下中翁とはやはり同じ兵庫県の生まれでございますが、こういう偉い先輩がおるといふことは若い時から知っておったんです。教育界から身を起こして、日本第一の出版業者になられ、わが国文化に非常に貢献をされた偉い人であるといふことは承知しております。初めて下中翁と——その時分に君と云っておりましたが、一緒に仕事をしたのが、東亜建設連盟というものをやったときです。世間ではこれを「東建連」と呼んでいた。その会長は連合艦隊司令長官であった末次信正海軍大将、下中君がその幹事長のような役をしまして、これは連盟であつて中野正剛君の東方会も参加し、日本青年同志会とか言つた橋本欣五郎君もやつて来た。私は国民同盟を代表してこれに加わつたのございます。その会でやつたことは東亜的の解放といふことなんです。その時までは近衛内閣は支那事変の目的として東亜新秩序の建設と云つておつた。東亜新秩序といふの

は、日本と満洲と北支を連ねて極東の新秩序を作るといふのであつた。それではしかしながら道義において欠けるところがあるので、この東建連は、東亜——インド、パキスタンを含め、ビルマ、タイ及びベトナム等のインド支那、これは東亜において、ヨーロッパ勢力、わけても英米勢力が経済的にも政治的にも支配しておる、これを拭いて各民族同じ立場で東亜の自由を回復しようといふことを、一口で言いますと東亜建設連盟の理想であつたわけです。下中君がその道では一番先輩であるにかかわらず、自ら世話役を引き受けて少しも劣を厭わずこの運動を続けたのであります。時代はいえ昭和十三年から五年まで位の間だと思ひます。この運動が間接か直接かやはり日本の軍部にも浸透して、初めは新秩序なんといふようなことをいっておつたが、戦争半ば以後から大東亜共栄圏という思想にまとも、東条内閣もこれを鼓吹しましたが、しかしながら十分に実行をみずして敗戦の憂目をみたのであります。

下中君はいつ頃からさうな構想を持たれたのであるか、私はこれから研究しようと思つておるのです。ただしわが国には明治中期以来同様の考へを持つておる先輩はたくさん出ております。中国との関係は今あの通りになっておりますが、辛亥革命で孫文その他を援けて——その時分には支那といつておつたが——支那民族の独立をはかりとういふ先輩もあつたことは御承知でございます。また印度においてはボース君その他を日本に呼んで、印度の独立のお世話をした先輩もおられます。今のベトナムもちやうど日露

「民族と政治」 37. 3月号

アラブの指導者と下中翁

中曾根 康 弘

私のような若い者が皆様方にお話しを申し上げるといふ機会を与えられましたことは大へん僥越に存じますが、戦後下中先生に最も可愛がられた政治家の一人として、思い出話しようという司会者の御命令であると思ひますのでしばらく時間を拝借いたします。確か昭和三十一年であったと思ひますが、岸先生が総理大臣として東南アジアに参りました時に、私は随員としてインドその他に随行いたしました。下中先生は中谷さんと先行いたしました。ネールやその他に対する下中先生をやっておられました。そうしてプラタップさんとかインド独立の志士達と久し振りに会って非常に元気に喜んでおられた。岸さんのインド訪問が終わってセイロンから台湾の方にお帰になりました時に、私は前からしめし合せて一行から脱落して下中先生と中谷さんと三人でナセル大統領に会いに行こうという事になり、パキスタンからイランに向つたのであります。その時にイランの大使は後の外務次官になりました山田久就さんでありましたが、非常に歓待してくれました。そこでいよいよエジプトに入る前、われわれ三人は鼎談をして、ナセル大統領に何を話そうかという相談をしたわけです。何しろ相手は米英あるいはソ連フ

ンスを向うに回わして大立ち回りを演じつゝある世界の英雄であります。そこへわれわれ三人が行つて変なことをいつたら、日本の面目を失ふという気持ちがありましたので、三人で相談をしたわけです。その時にフト私が付いたのはアスワンハイダムの問題であります。アスワンハイダムという大計画をナセルはやっておりましたがその資金援助をアメリカに蹴られて非常に苦しい立場にありました。そこで私は三人の話の時、アスワンハイダムを作るのに日本が協力したらどうか、ということをおっしゃるともしたら下中先生は一人言のようにつぶやいた。「アスワンハイダムはアジア、アフリカの手で作るんだ」それが雷のようにはわれわれの意をうちまして、「そうだ」そこに日本の大きな進路があるということを感じて、初めて大きな目標を教えていただいたような気がして勇躍してエジプトに向つたのであります。下中先生のつぶやきの一言によってわれわれは光明を与えられたのであります。あの時の感激というものは、私終生忘れることはできません。そうしていよいよナセル大統領に会いました時に、たまたま下中先生は八十歳、これは明治、大正の方であつて、中谷先生は六十歳、これは大正から大東亜戦争までの人で、私は四十歳、これは日本の終戦以来の若い者で三代の日本人がナセル大統領に敬意を表したという話を話したら、ナセルは非常に喜びました。日本は非常に偉いと誉められた。何故偉いかと聞きましたら、「日露戦争でロシアを破つたじゃないか」と言つた。われわれは日露戦争のことはすっぱり忘れておりましたけれども初めてナセル大統領から正式に誉められたので非常に心強く思つた次第です。その時にアスワンハイダムの問題が



下中翁の郷里から贈られた大土版右は茅東大総長

出まして、かねての打ち合わせによつて、ナセル大統領にアスワンハイダムは欧米白人種の手によつて作られるという事は余り感心しない、われわれアジア、アフリカ勢力の手で作ろうじゃないか、日本の技術に一つ仕事させてもらいたいところといったら、ナセル大統領は「ベリ・グッド・アイデア」とこゝろ言われました。そんなことでナセル大統領もわれわれの協力を受け入れてくれる気持ちがあるというところをみて、この問題について高崎達之助先生その他にすぐ電報を打つた。「こういふ話があつたから日本の方でも受け入れ態勢を作つてくれ」と連絡した。その後それがいろいろ展開して参りました。彼等は初めて日本のダム技術を見て非常に驚いたのであります。また日本の発電機械その他を見て日本というものを非常に認識いたしました。いざという時には日本にも頼もうというところ、その人たちは帰つたのであります。ところがそれをみて非常

に驚いたのはソ連だつたと思ひます。そこでソ連の方は急に二分一厘の金利で非常に安く工事をやるということになり、そのためにナセル大統領は止むを得ずソ連の勧誘に応じてこれは恐らく財政上の理由であつたと思ふんですがソ連がやるということになった。われわれはそれを聞いて非常に残念に思つた。そしてこれはまたアメリカの大失敗だと思つた。ともかくあの近東の要衝を占めており、スエズ運河を握つてエジプトというものは、世界政策のカナメに在る。その世界政策の要にあるところにソ連の力が入つてきたら万一の場合の時にどうなるか、そういう意味において世界政局の重大性を考えたならば、これはいかなる犠牲を払つても自由世界がエジプトに協力すべき問題だとわれわれは思つておつたところでありまして、自由陣営と言つたやれない、日本ならやれる。そういう意味において日本が前進して行くべきものであるとわれわれは考へたのであります。しかしそれはそのようになったのは甚だ残念であつたわけでありまして、しかし、そのあとエジプトとの関係が非常に開けて、工業大臣のシドキという人が日本に参りまして、高橋さんや、下中さんや中谷さんと会つてその結果エジプトの工業建設五カ年計画に協力しようという道が開かれて、三千万ドルの借款をエジプトに与へまして、その結果たゞいまの冷凍設備とか、製糖工場であるとか繊維関係であるとか、あるいはスエズ運河の改修工事まで日本がやるというふうになりました。あの中近東からアフリカの一角にかけて日本は工業的に非常に進出をいたしました。アフリカのショーウィンドーみたいなところ、仕事をやるようになったのは、考へてみれば下中先生のつぶやきが原因であつたわけ

「民族と政治」 37. 3月号

であります。

二

われわれはそれからシリアに参りまして、まだシリアは合併する前であつてクワトリ大統領がおりました。下中先生がクワトリ大統領に対し、核実験の禁止を非常に強くいわれまして、そうしないと人類は滅亡する、どんな大国であろうが、どんな小国であろうがこの問題を人類の共通の課題として、われわれは強く訴へたい私は老軀を提げて此の国に来たのもそれを訴えんためである、と下中先生は顔を高潮させながらいわれましたら、クワトリ大統領もそれを聞いて、涙をばらはら流しながら、われわれは全く共鳴する断じて協力してやりましょう、と下中先生と大きな手で握手をいたしました。クワトリと下中の二人の民族運動の先輩が、そういう大きな人類の課題で協力を誓つて握手をし、しかも一方は涙を流しているのを見て私も非常に打たれたのであります。それから話しは横道にそれますが、そういう感激的な仕事をおやりになつた一面われわれエジプトに参りました時に、われわれも若いもんだから一つ裸ダンスを見ようということになつて、下中先生と中谷先生と私と大使館の人に連れていただいて裸ダンスを見に行きました。そうすると、エジプトの裸ダンスはなかなか面白いもので、裸ダンスの十八、九の美人が尻をくねくね振り乍らお客の方にぐるぐる廻つて、下中先生の方に来た。そして下中先生の手をひいてつてステージの上へ上げて、二人でステージを一周した。これを見て観衆は万雷のような拍手をした。しかし下中先生はそれを眉一つ動かさずに

やりました。私はさすがに達人は違つたものだと思ひました。下中先生の風貌を見ておきますと、私は何だか坂本竜馬と高杉晋作を一緒にしたような感じがいたしまして、そういう国士的な風貌がある方と思つておりましたけれども、そういう平然として、エジプトの美女と踊る。そういう洒落気もある方であると知りまして、私は更めて下中先生に敬意を表したのであります。

三

レバノンに参りまして松野という公使から晩飯の御馳走になつて、いろいろ話しをしておつた時にヒツタイト民族の話が出たのであります。中谷先生がそのヒツタイト民族の研究をして居られて日本民族の祖先とヒツタイト民族は同民族であるという説を盛んに述べた。その話しをしておる中に松野公使はそのヒツタイトと同じ頃の、また恐らく同じ民族と思われる四、五千年位前にアツシリヤメソポタシア地方に住んでおつたというスメル民族の掘り出しものの石像がある、これは非常に貴重なものらしい、東大の江上博士がベイルートの古美術商の店先で発見したけれども、それを買う金が足りない、そこで内地から義金をもらつてそれを買い入れた、それが公使館の金庫の中に保管しておるといふ。われわれは「そんな珍らしいものならば一つ見せて呉れ」と、頼みましたら、公使は恐る恐る持つて来た。そのスメル民族の像を見たら、私のお爺さんにそっくりな顔をしておる、これはやはり祖先は同じに違ひない、そう言ひましたら下中先生は「この金は僕が出して上げたんだよとボンリと言われまして、われわれはそれを聞いて非常に驚いたんであり

ます。この老人は何処で何をしておるかわからない、恐らく人の目につかんとついで、そういうことのために相当莫大なお金を出しておられるに違ひない。それも物が出て来て顔を見て、我々が驚いた時に下中先生はつぶやいた、そういう一事をみましても全く惜しいわれわれの大先輩を失つたと思ひます。私は晩年下中先生に可愛がられまして、いつも私が相談に行くとも何でもウンウンといわれるので、大イース・マンと思つておりました。私も晩年としを取つたらああいう態度でいかなければならぬと感じたのであります。下中先生は今のお話しにもありましたように陶工弥三郎ということを経後に言われた。私はそれを聞きまして時に、あの先生はもうソロソロあつちの準備をしておるなと思ひあたりました。私陶工弥三郎という言葉が何ともいえない感じをもつて受け入れたのであります。もう安心立命の大往生を上げられる、そういうふうなわれわれは感じました。そして私は去年その頃には憲法の調査で南米におつたんですが、外国新聞で先生の訃報を拝見いたしました非常に悲しみをかほえると共にやはり先生は土に帰つたんだ、先生は陶工弥三郎の土に帰つて、さぞ満足だろ、そういう気持ちもいたしました。今日はいろいろお世話になりましたこと十年ばかりの短い過去を振り返りまして、先生を偲ぶ心が一しほであります、先生のこの大きな愛情に包まれて私たちは大いに育つて行きたいと存じて居ります。

百折不撓の意志力

高杉晋一

私は下中翁とは仕事も違つておりましたのでその接触する面がきわめて限られており、年限からいひましても翁の晩年の三四年間の付き合いでございます。或る会を通じましての会合の席上での接触到過ぎませんのでこの偉大なる翁の人格風格を観察し認識するためにあまりに局面が狭くまた年限が短いのであります。例えて申しますならばあなたも群盲が象をなでる程度のものでございます。私が財界からこういふ翁の追憶を述べるといふようなことは誠に僭越の次第でありまして心中ひそかに恐縮に存じておる次第でございます。われわれの作りました会は、白寿会と申して、これは翁が名付けられた会の名称でございますが、白寿という字は百という字から一本取つた字で百まではともかくとして、お互に九十九まで位は生きようじゃないか、こういう趣旨の下に作られた会合でございます。会員と申しますとわずか七名であります。翁を初めといたしまして、各界のちよつと気の合うような連中を集めて作つたのであります。弁護士もおれば医者もおる、文士もおれば浪人もおる。こういうような会合でございます。晩年の三年間位は翁も非常にこの会に興味を持たれまして、万障繰り合わせてこの会に出席してお

「民族と政治」 37. 3月号

られました。毎月あるいは隔月にこの会議を聞いておりました。会費制度でありまして、簡単な料理屋で極めて手軽にやります。そして飲んだり食べたりして思う存分勝手なことをいい合う、こういう会であったのです。この会合を通じて私の翁に対する印象は、どうも下中翁は実に強い個性の持ち主である、万人にすぐれた強い個性を持っておられ、強い信念、それから百折不撓の意志力まことにどうもわれわれが範とするに足る立派な大人物であると段々考えて参りまして、翁に対して心から尊敬するようになったのでございます。いろいろ話しをしておきますと、翁の話しまする究局の目的は、先程たびたびお話しになりました世界連邦の出現によって、世界の平和、人類の幸福を実現しよう、こういう大きな理想をもっておられた。この理想は恐らく私は全人類の悲願であろうと思っております。その世界連邦のことにありますと、非常に熱心になりまして、ある時のごときは「世界連邦実現のために私はソ連に行く直接フルシチョフに会って、そして辭得しなければならぬ、それには、ただ単に反共、反共と言っていてはいかん。またアメリカに行くとアイゼンハワー大統領にも会う、そして彼の考えの間違っているところをただしてやらなければならぬ」こういうことも言われたのであります。そして翁の考から申しますと全世界の政治家の考え方がみんな間違っている。こういうふうな受け取られるのであります。そこで質問いたしました、「しからは先生はどういう自分の思想、どういふプリンシプルでこれらの方々と接するの」と聞いてみますと、「それは惟神の道である、日本に伝わったところの惟神の思想、これは本当の人類救済の思想、これをもって突き当たるん

だ」こういうことを言っておられたのでございます。会のある度にこういう問答が繰り返されたのでございます。

二

残念乍ら晩年無理をして東南アジアやヨーロッパの方に旅行せられそれが翁の健康に非常に影響したと見えまして、われわれが会う度に段々と健康が衰えていく。まことに困ったものだ、何とかしてこれを元気にする方法を考えようじゃないかということで、同じメンバーでありますところの漢方医の大家の酒井安蔵博士に頼んで、「いろいろ漢方の薬なんかをこしらえて、「先生、これをお呑みなさい」と言っておられ、これを服用することをすすめたのであります。果して服用されたかどうかはわかりませんが、ついに健康を取り戻すことができずに長逝された次第であります。以来この白寿会というもただ一回翁を偲ぶ会を開いておるんであります。何か頭が失くなったような気がいたしまして気の抜けたような状態で、今後何とかしてこの会合は続けていこうじゃないか、こういうような話をしておる次第でございます。また翁はこの会に対して非常に親しみをもちました。一九五八年に私がアメリカに経済使節として参りまして、その時に帰って参りましたら翁はこれは御苦勞であった、一つ記念に僕の初釜の血を上げようというので万葉集を書いた楕円形の大きな皿を五枚ばかり頂戴いたしました。白寿会の人にはこういうものをだんだんくればやろうというのであります。また翁の個展が三越あたりで開かれた時に

は何をおいても拝観に参りましてその中の二三点を手に入れておりました。翁の箱書を頂戴して今でも愛玩しております。晩年陶工三郎として生涯を終りたいというのを翁もたびたび言っておったのでございます。翁にさらに寿を借すに五年ないし十年を以てしましたならばおそらく後生に残る立派な名品がもつとたくさん出来ておったんじゃないかと思っております。結局、私考えまするに翁の夢はあくまでも世界連邦の創設、全世界の平和ということにあったと思っております。その夢が達成されるやいなや、これは大きな問題であります。これが百年かかるか、二百年かかるか、おそらく私共の夢といたしましてやがて達成される時が必ず来るのではないかと思っております。

三

丁度私かここに参ります前まで、私の友人でこの間欧州を視察に参りました、EECのコンモンマーケットの事情を詳しく視察して参った人が居りました。そして共同体の在り方、将来の見通しについて話しておったのであります。それによりまして、とにかくEECの発展というものはわれわれの想像以上に立派に発展しておる。現に労働者の自由な移動が行われ、イタリアあたりもどんどんどんと西独あたりに行っておる。この次に来るのはおそらく貨幣の統一であろう、そしてその次に来るのは政治的統合だろう、おそらくそこまで行くのじゃないか、こういうことを言っておりました。これが果して将来自由圏内に於ける共同体というものに発展するかどうかわかりませんが、同じような共同体の構想が東南アジアに

も出来て来ておる。太平洋方面、あらゆる方面に構想としては生まれて来ておるような情勢でございます。やがて各ブロック、ブロックにそういう経済共同体が出来て、それから政治統合体に変わり、やがて自由圏は丸となって共同体、さらに怒を申しますならば共産圏が鉄のカーテンを上げて自由と自由圏との交流をなし、次に共産主義も自由主義もない、全世界が一つとなってこの翁の夢としておられたところの世界連邦の理想が達成できるのではないか、こういうように私は考えている次第であります。われわれは翁の思想に傾倒する一人といたしまして、世界連邦、全世界の平和のために一歩でも、あるいは一寸でも近づくように祈念し、かつ努力する責任があるように思っております。このことを翁の霊前に申し上げまして、私の追憶の言葉を終りたいと存じます。

世界平和運動の心の支え

湯川 秀樹

下中三郎翁が亡くなりまして早や一年の月日が経過したのでございまして、私たちの下中翁を追慕する気持はますます切なるものがあるのではないかと存じます。

今日の世界、この激動しております世界の中に生きております私どもは、下中翁のような方になお生きていただきたかった、わ

「民族と政治」 37. 3月号

れわれ日本人のためにも、また人類全体のためにもぜひ今日もまたこれから先も、なお生き続けて人類の存続繁栄のために、また世界の平和のために、その大きな力を發揮していただきたいと思う気持ちがあります。強いのでございます。

私は下中翁に初めてお目にかかりましたのはいつのことでありましたか。はっきり覚えておりませんが、そんなに以前ではございません。確か「世界百科全書」の大きな計画をされて、それにつきまして私に御相談がありました。その頃が初めではなかったかと思うんです。「世界百科全書」のことについてお話しを初めておるうちに、いつの間にか私は下中翁をずっと以前からよく知っておる人のように思うようになりました。

「百科全書」だけでなくいろいろと他の話もいたしました。下中翁は世界連邦のことを話し出されました。私もかねがね世界連邦の思想には大いに共鳴をいたしておりました。たちまち話が合いました。下中さんが世界連邦のわが国の運動の中心におられるならば、これは大へん安心だ、非常に力強いことであると感じるようになったのでございます。それからどちが先であったか後であるかはっきりとは覚えておりませんが、アインシュタイン博士が亡くなつた頃、ちょうどその直前でありました。御承知の方も多いと思いますが、アインシュタイン氏とバートランドラッセル氏が相談をいたしました。こういう現在の状態では人類の前途は甚だ危むべきものがある、自分たちが世界の何人かの科学者たちの協力を得て、人類の危機を世界に明らかにし、どうすれば危機が救われるかということについて、世界中の科学者の知恵を集めて、その方向に

次第であります。

二

この世界連邦建設の運動そのものにつきましても、ここで詳しく申し上げる暇ではないと存じますが、下中翁三郎翁という非常に大きな推進力がありました。お陰で、わが国の世界連邦運動は非常に盛んでありまして、ますます盛大になりつつありまして、米年には世界連邦世界協会の総会、世界大会を我が国で開くというところまで来ておるんであります。私もそれに関係しておる一人といたしまして、これから先もそういう運動を続けて行きます。つきましては、いつもただいま私達の後ろで下中翁が私たち皆んなを見守り、また大きな支援を無言の中に与えて下さっておりますように、これから先きも、下中翁はすでにこの世を去られましたけれども、やっぱり下中翁三郎翁を私たちの大きな心の支えとして進んで行きたいものだと思っておる次第で御在います。

最後にもう一つ私事にあたりますけれども付け加えさせていたいただきたいと思ひます。

先程中曾根さんのお話にもございましたように、下中翁は人に知れない、いろいろな善根をつんで来られた方でありました。到底他の人には真似の出来ないような陰徳を施しておられた方でありました。私もまたその恩恵に浴しておる者の一人でございます。これも七八年前、下中翁にお目にかかってそれからあまり時が経ってこない頃でありました。私は当時出来ましてまもない京都大学の基礎物理学研究所という新しい研究所のお世話をすることになっており

パルチオ

進んでいかなきゃならない、ついでにはこれに協力をして参加して欲しいということ、ちょうどアインシュタインの亡くなる少し前にバートランドラッセル氏から私にも連絡がございまして、私も喜んでそれに参加いたしました。世界中から十人ばかりの人がそれに名参加いたしました。それがやがて世界に公表された頃には、アインシュタイン博士はすでに亡くなっておったんでありますが、それがよく知られております。「ラッセル・アインシュタイン声明」であります。その声明の中には各国の科学者、自由諸国の科学者もまた共産圏の科学者もいろいろな立場を離れ、世界家族の一員として何所かに集まって世界平和の問題を科学的な立場から議論する、そういう意味が含まれておるんであります。それがやがて二年程経ちまして、カナダの「マニトワ」でその会議が開かれるようになりまして、私なども参加をいたしました。ところが、その際にも下中翁はもうこの私の話しを聞かれました。非常に喜ばれ激励され、それからまた下中翁は、一方では世界連邦建設の運動を進められると同時に、何かもう少し、その時々世界情勢の変化に対して、それが人類を破局に導かないように、その時々々に警告を発する、あるいは要望する、外国の主権者でありますとかあるいはまた国連とかにアピールする、というそういうための集まりというものを作りたいという御相談がありました。私もその趣意に賛成いたしました。やがて「世界平和アッピール七人委員会」というものが出来まして、下中翁が中心となりまして、その機能を發揮して参ったのであります。下中翁が亡くなりまして、やはり下中翁の志しを継ぎまして、私たちがその活動を続けておる

ました。この研究所のことを詳しく申し上げる暇ではございませんが、それまでにございましたいろいろな研究所と非常に性格が違っております。京都大学の中にございますけれども、日本全国からその時々に応じまして研究者がやってくるので、そこではいろいろな問題を討論し、研究をする、そういう一つの新しい場であったのであります。ところがそういうふうな研究所が機能が発揮いたしましたためには何か一種の合宿所のようなものが心要なのでございます。残念ながら研究所にはそういう施設がございませんから何とかして近くに宿舎というものを一つ欲しいと思っておりました。幸いにしてそれにふさわしい家がみつかったんでありますけれども、これは国家の予算で買いたいという事は非常に困難でありまして、そういう話を下中さんに申しましたら、直ぐに自分が何とかしようとおっしゃいます。じきに宿舎を手に入れることが出来ました。それ以後今日に至るまでおそらく延べ何千人という多数の研究者がここに宿泊して来たのであります。これが私達の研究に非常に大きな陰の力となっておるのでございます。この機会を拝借いたしましたので私の感謝の敬意を表したいと思っております。

下中翁と大隈侯

松村謙三